

みちのく

ココロとカラダの癒し旅

アソベの森いわき荘



山ふところに抱かれて

人には、戸籍上の故郷という概念とは別に、何か、胸の奥に大切にしまっておいたような、「心のふるさと」といったものがあるのではないだろうか。

多くの津軽の人たちにとって、標高一、六二五mの独立峰「岩木山」はまさしく「心のふるさと」だ。朝に夕にお山を仰ぎ、そしてお山に見守られている気持ちになる。お山は信仰の対象であり、農民はお山に現われる残雪の形状や植物の芽吹きに農作業の頃合を知る。出稼ぎに向かう男たちは、遠ざかる岩木山に故郷を離れるわびしさを覚え、車窓に見えてくる岩木山に、やっつふるさとに帰ってきたことを実感する。

津軽に生まれ育った人でなくとも、岩木山の秀麗な山容には、なにやら畏敬の念をすら抱かせられる。

その岩木山の山ふところに、「アソベの森いわき荘」という宿がある。前身は国民宿舎だったが、平成十二年にリニューアルしてしゃれた温泉リゾートホテルに生まれ変わった。

リニューアルの際し、冬のうちに岩木山からブナの小木を刈り出してきて館内で使用する照明の部材にした。季節が暖かくなってきたて宿が営業を始めると、その照明の部材にしたブナの枝から新芽が吹き出したのだという。そんな愉快なエピソードを、楽しそうに話してくれる宿のスタッフ…。いわき荘は、岩木山の大自然と一体化したような宿なのだ。



レストラン・アソベの森。オブジェ風の照明が印象的



「アソベの森」とは岩木山の古名



新館客室



サイズ違いの浴衣が用意されている



きびきびと働く若いスタッフたち



「すぶとの間」の囲炉裏。1日1組限定で炭火焼き料理を楽しめる



雪の津軽で過すゆわき

いわき荘にもほど近い岩木山神社は、岩木山全体をご神体とする津軽でも最高格の神社で、津軽藩が威信を賭けて造営したといわれる神社建築は豪華絢爛。「奥の日光」とも呼ばれる。また、岩木山は休火山であり、山麓一帯は温泉の宝庫になっている。いわき荘や岩木山神社のある一角は、百沢温泉郷と呼ばれて庶民的な温泉宿が並び、神社の参拝客や観光客に加えて、農閑期にもなると近郊近在の農家の人たちが骨休めに訪れてにぎわいを見せるのだ。

しかし、「アソベの森 いわき荘」を語る時、周辺の見どころをあれこれ語る必要はないかもしれない。あなたは、岩木山のおもむきに自前の別荘を持っているつもりになって、そこでのんびりとした時間を過ごすことだけ考えていたらいいたろう。「いわき荘」のチェックインは午後一時、チェックアウトは正午。ほぼ一日のんびりと過ごすことができるのだ。実際、遠方から毎月のように通ってくる（！）人や二、三日の連泊をする人もこの宿では珍しくない。宿泊料金も比較的抑えた設定になっているのが庶民にはうれしい。

部屋のタイプも多様で、大小の和室やツインベッドの洋室などがあり、一人旅、夫婦連れ、家族、グループと柔軟に対応している。また、床の段差をなくして浴室やトイレに手すりをつけたバリアフリー対応の部屋を利用すれば車椅子の人でも快適に泊まることのできるし、ミニキッチンのある部屋で自炊をしながら長期滞在を決め込むこともできる。



夕食には「津軽かかやま料理」と名付けられている。「かかやま」は「母なる山」の意

食事もこの宿の楽しみの一つ。自然の宝庫津軽は、食材の宝庫でもある。地元のみずみずしい食材を活かして、地元出身で腕に覚えのある料理人が、箸を運ぶのが楽しくなるような料理に仕上げていく。献立にありきたりな感じがしないのが好ましい。思わず、「いい仕事していますねえ」とつぶやきたくなる。デザートはリンゴのシャーベット。レストランの一角には「ご自由どうぞ」とリンゴがまると盛られている。こんな演出も津軽ならではの。

もしあなたが新婚旅行やフルムーン旅行、結婚記念日の旅行を考えておられるなら、この宿のユニークな趣向を紹介しておこう。

館内には「すぶとの間」という一角がある。「すぶと」とは津軽弁で囲炉裏のこと。普段は風呂上がりに自由にくつろぐ空間だが、事前に申し込んでおくと夕食時にこの囲炉裏端で通常メニューとは別の炭火焼料理を楽しむことができる。そんな至福の時を過ごせるのは一日一組限定。同伴者には直前まで内緒にしておくのがよろしいだろう。

リンゴはご自由にどうぞ



朝食の箱膳



「けの汁」は津軽の伝統料理。お好きなだけセルフサービスで

心和民芸調のロビー



本館のヒバ風呂は貸切利用もできる



青森ヒバの湯舟。気分は「桧風呂」



湯温計が42.8℃を示している



露天風呂は屋根のかかった半露天スタイル。
雨や雪の日も楽しめる



ヒバの湯舟で芯から温まる

大地の恵み、休火山岩木山の地底から湧き出す温泉に浸ろう。

岩木山神社の鎮守の森の地下三三mから毎分七百リットルも湧き出す豊富な湯量の温泉は、ナトリウム・マグネシウム炭酸水素塩・塩化物泉。源泉温度は48.5度もあり、別名「熱の湯」とも呼ばれている。身体を芯から温め、湯冷めしにくい、冬にこそありがたい温泉だ。

大浴場は、浴場全体も湯舟も青森特産の総ヒバ造り。木曾松、秋田杉とともに日本三大美林の一つに数えられる青森ヒバは、ヒノキ科アスナロ属の針葉樹で和名をヒノキアスナロという。ヒノキといえば高貴な芳香が特長の木だが、ヒバもまた、ヒノキ科ならではの芳香を持つ。いわば、大浴場は「桧風呂」そのもの。人の気持ちを鎮静させる効果があるという青森ヒバの香りに包まれて熱い湯に身を浸すひとききは、つい「極楽極楽」とつぶやきたくなるというもの。大浴場の外には露天風呂もある。コナラの自然林にしんと降り雪を眺めながらの雪見風呂も風流。

大浴場と露天風呂は、この宿がリニューアルオープンした時に新設されたものだが、もう一つある浴場も紹介しておこう。

棟続きにある本館のヒバ風呂は、この宿の国民宿舎時代からのもので、男女とも同じ大きさの湯舟は四、五人も入れればいっぱいになる小振りなもの。宿泊客は、大浴場もこのヒバ風呂も好みで自由に入浴できるが、このヒバ風呂は夕方四時半から九時半までの間は有料(千五百円)で二時間単位で

総ヒバ造りの大浴場





弘前市は歴史的建造物の宝庫。
上・旧弘前市立図書館
右・弘前学院外人宣教師館



津軽鉄道のストーブ列車

冬ならではの旅を楽しもう

貸切利用できる。いわき荘の浴場は混浴ではないが、この貸切風呂を利用すれば、夫婦や家族で水入らずのお風呂タイムも楽しめるというわけだ。

みちのくの長く厳しい冬。しかし、こんな季節だからこそ、どこかホッとさせられる宿に出会いたいし、そんな旅を楽しみたい。アソベの森いわき荘は、そんな旅の宿にふさわしい。

秋田から出かけるのであれば、JRの人気列車、五能線経由弘前行き「リゾートしらかみ号」(三月三十一日までは土日祝日のみの運転)を利用するのも面白いのではないだろうか。厳冬の荒れ狂う日本海を眺めながらの列車の旅は、他の季節、他の土地では決して味わえない醍醐味。弘前駅からは宿の無料送迎シャトルバスを利用できる。

冬の津軽といえば、五所川原から出ている津軽鉄道のストーブ列車もこの

季節ならではのものです。大いに旅人の旅愁をかき立てる。歴史ある町・弘前にはノスタルジーを感じさせるレトロな建造物も多い。そんな冬の北辺の街を散策するのも面白いだろう。いわき荘から五所川原までは車で約一時間、弘前までは四十分。またすぐ近くには岩木山百沢スキー場もある。いわき荘を拠点にすれば何日でも津軽の冬を満喫できる。

希望すれば館内でもあけびつるや草木染めなどのクラフト体験もできる(要予約)。寒い季節にはハワイや沖縄といった暖かい観光地を目ざすのでもいいが、その逆に、思いきり寒い季節に浸るという過ごし方も楽しそう。この季節にいわき荘のよ

うな宿に旅をすれば、改めて東北の冬が愛おしいものに思えてくるのではないだろうか。

(文・写真IIかとう、
りゅうせいII秋田市)

I W A K I S O U

施設のご案内

【新館】

- 客室26室/130名様収容
- レストラン100席
- 宴会場/200名様収容
- 青森ヒバ造り大浴場
- 天然岩造り露天風呂
- 湯あがり処・すぐの間
- 会議室 ●売店
- 情報コーナー

【本館】

- 客室12室/42名様収容
- 本館ヒバ風呂 (貸切利用可能)

お一人様1泊2食付
ツインルーム 9,000円より(税別)



アソベの森 いわき荘

〒036-1343 青森県中津軽郡岩木町大字百沢字寺沢28-29

Tel.0172-83-2215 Fax.0172-83-2855

ホームページ <http://www.iwakisou.or.jp>

Eメール info-i@iwakisou.or.jp